

研究ノート

国際性と多様性を求める外国ルーツ生の進路選択 ——日本はホームであり続けるのか——

首 藤 佳 世
谷 津 裕 子

東京国際大学論叢 グローバルスタディーズ論集 第7号 抜刷
2026年（令和8年）3月20日

研究ノート

国際性と多様性を求める外国ルーツ生の進路選択

——日本はホームであり続けるのか——

首 藤 佳 世
谷 津 裕 子

Career Paths of Students with Foreign Roots in Pursuit of Internationality and Diversity

“Will Japan remain their home?”

SUTO, Kayo
YATSU, Hiroko

Abstract

This study examines the pathways to higher education and career development awareness of students with foreign roots at Tokyo International University, with the aim of considering appropriate forms of university support. At Tokyo International University, there are students with foreign roots who do not fall within the conventional category of international students. With one or both parents of foreign nationality and long-term residence in Japan, they represent a distinct “third group” with unique educational needs and career potential. Drawing on interviews with ten students, this study, from the perspective of Japanese language instructors, examines the factors behind this university enrollment and perceptions of career development. The findings highlight the university’s role as an entry point to higher education for students with foreign roots and the factors supporting this role. They also revealed that, despite concerns about Japan’s labor environment and linguistic challenges, these students are actively seeking employment in Japan. Therefore, this study proposes a comprehensive support framework to assist their career choices and employment opportunities.

Keywords: students with foreign roots, university enrollment, career development, Japanese language support, multilingual speakers

要 旨

本稿は、東京国際大学（TIU）に在学する外国にルーツを持つ学生を対象に、彼らの大学進学の際緯とキャリア形成の意識を明らかにし、大学における支援のあり方を検討することを目的とした。日本では移民的背景を持つ外国にルーツを持つ学生が増加しているものの、彼らの教育や進路選択における課題は十分に解明されていない。外国にルーツを持つ学生は、長期の滞日経験を持ち、一般的な留学生とは異なる教育ニーズと進路選択の可能性を有している。TIUに在学する外国にルーツを持つ学生10名へのインタビュー調査では、TIUを進学先として選択した理由として、大学の国際性と多様性、英語力向上への期待、そして入学のしやすさが挙げられた。また、彼らの多くは日本を「ホーム」と感じ、卒業後は日本での就職を希望していることが明らかになった。しかし、大学入学時には求められなかった日本語能力の不足が課題として挙げられた。特にアカデミックな日本語力や敬語等ビジネスに必要な日本語力に対する不安が強いことがわかった。また、日本企業の労働文化や早期の就職活動に対する不安も語られ、外資系企業やグローバル企業への就職を目指す学生が少なくなかった。本研究では、外国にルーツを持つ学生が直面する課題を明らかにし、彼らの多様な背景や教育ニーズに応じた支援の重要性に関する示唆を得た。大学における個別支援やコミュニティ形成、ロールモデルの提示、日本語教育の充実が求められる。大学全体での情報共有と連携による包括的な支援体制の構築が、外国にルーツを持つ学生のキャリア形成を後押しする可能性が示唆された。

キーワード：外国ルーツ、大学進学、キャリア形成、日本語支援、複言語話者

目 次

- はじめに
- 1. 概況
 - 1.1 移民的背景を持つ人口の増加
 - 1.2 外国にルーツを持つ児童生徒の増加
 - 1.3 見えない存在になる外国にルーツを持つ学生
 - 1.4 東京国際大学の日本語教育
- 2. 先行研究
 - 2.1 大学の特別入試制度
 - 2.2 大学入学後の進路選択
- 3. 本研究の目的
- 4. 研究の概要
 - 4.1 調査方法
 - 4.2 協力者について
- 5. インタビュー結果
 - 5.1 大学進学の原因
 - 5.2 キャリア形成の意識
- 6. まとめと実践への示唆
 - 6.1 まとめ

6.2 実践への示唆 おわりに

はじめに

東京国際大学 (Tokyo International University 略称TIU) には、一般的な留学生とは大学進学
の経緯が異なる外国にルーツを持つ学生が在学している。¹⁾ 滞日年数が長く、TIU入学以前に日本
国内の小学校、中学校、高校、インターナショナルスクール等の外国人学校に在学していた学生
である。本人の国籍にかかわらず、どちらか一方の親かあるいは両親が外国人で、移民的な背景
を持っている。

English Track (英語で学位を取得するプログラム。以下Eトラック) で日本語コースを担当する
教員は、授業で扱うトピックや課題を通じて、学生の大学入学以前の生活、それまでの日本語学
習の環境について知ることがある。一般的な留学生が大学進学を機に来日するのに対し、外国に
ルーツを持つ学生は一定の滞日年数を経ており、大学進学に至る過程も、それまでに習得した日
本語も、異なることが多い。例えば、日本語コースの中では、聞く・話す力は該当レベル以上で
自然な日本語を流暢に話す、それに比べると読む・書く力が弱く、本人たちの苦手意識も強い
ことが見て取れる。言語における4技能の中で、聞く・話す力と、読む・書く力の隔たりが大き
いのだが、口頭表現を聞いている限りではその特徴に気付きにくい。作文課題やレポートを目にし
た時に初めて、その隔たりに気付かされる。

外国にルーツを持つ生徒を対象とした特別入試を実施する大学は、全国的に見て増加傾向にあ
る。在留外国人が増え続ける日本社会の内なる国際化に対応した取り組みといえる。だが、その
ような入試制度を利用して大学に進学した一部の学生を除き、外国にルーツを持つ学生は国内学
生として大学に入学する。そして入学後は、一般的な国内学生や留学生に内包される形で「見え
ない」存在となり、仮にアカデミックな日本語力の不足やアイデンティティの葛藤等の問題があっ
ても、その解決は自己努力に任されてしまう。

本稿の副題「日本はホーム」とは、本研究でインタビューに参加した外国にルーツを持つ学生
が自ら語った言葉である。外国にルーツを持つ学生は、一般的な国内学生あるいは留学生とは異
なる教育ニーズと進路選択の可能性を持っている。本研究の動機は、教員がこのような不可視の
学生にアプローチを試み、個々の背景と経験を知ることが、外国にルーツを持つ学生の日本語学
習と進路選択の双方における効果的な支援につながるのではないかと考えたことにある。

1. 概 況

1.1 移民的背景を持つ人口の増加

東京国際大学の外国にルーツを持つ学生の可視化を試みる足がかりとして、まず外国にルーツ
を持つ学生を取り巻く状況をまとめる。外国人が帯同する子どもの教育問題は、1990年の改正入
管法施行によりいわゆるニューカマーが子どもを帯同し、集住地域に幅広い年齢層の子どもが増
加する過程で注目を集めるようになった。現在では、国籍にかかわらず、どちらか一方の親かあ
るいは両親が外国人である子どもを指す「外国にルーツを持つ子ども」「外国につながるのある子
ども」という言葉が一定の広がりを見せている。

コロナウイルスによるパンデミック時に一時減少した在留外国人数は増加に転じ、出入国在留

管理庁の2024年末統計では376万人を超えた。²⁾ 在留外国人数は日本国籍を持たない在留者数を指し、外国にルーツを持つ居住者数はこれより多いと推測される。是川（2018）は、2015年国勢調査のデータから、帰化人口や国際見人口を含めた移民的背景を持つ人口は、同年の在留外国人数の約1.5倍にあたる約333万人であることを明らかにした。³⁾ また、2040年には移民的背景を持つ人口が約727万人になると予測し、日本は移民流入国として例外的な国ではないと指摘している。2023年の入管法改正により、家族帯同が可能な「特定技能2号」在留資格の対象分野が拡大したことを踏まえると、今後も外国にルーツを持つ子どもが増加することが予想される。⁴⁾

1.2 外国にルーツを持つ児童生徒の増加

在留外国人が増加する中で、外国にルーツを持つ児童生徒の教育はどのような状況にあるのだろうか。文部科学省が実施する「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果」によれば、全国の公立小学校・中学校・高校で日本語指導が必要とされる児童生徒数は6万9千人に上る。⁵⁾ 同調査における日本語指導が必要な高校生の進路状況を見ると、高等教育機関への進学率は、全高校生の75%に対して46.6%にとどまり、ここに大きな開きが存在する。調査結果は、高等教育機関への進学において日本語指導が必要な生徒が不利な立場に置かれていることを示している。しかしながら、初等・中等教育における日本語指導の内容（質）と期間（量）は、各自治体や学校の判断に任されているのが現状である。母語話者のレベルに追いつくのに少なくとも5年が必要とされる認知学習言語能力（Cognitive Academic Language Proficiency：CALP）を、外国にルーツを持つ児童生徒がどの程度身につけているか知るすべはなく、来日してからの居住地、通う学校、そこで出会う教員によって、学校内で受けられるサポートの内容（質）と期間（量）は異なる。⁶⁾ 初等・中等教育では、日本語指導が必要な児童生徒に十分な日本語指導を保障できていない問題を抱えている。

1.3 見えない存在になる外国にルーツを持つ学生

このような状況下で、通常の留学生枠とは別に、外国にルーツを持つ生徒を対象とした特別入試を実施する大学が微増している。その中には、関西国際大学のように、入学可能な学部を国際系に限定せず全学に広げた事例も見られる。⁷⁾ 外国にルーツを持つ生徒の増加と、少子化による若年人口の減少が同時に進行する社会状況に対応した取り組みが、少しずつ広がりを見せている。

しかしながら、全国的に見れば外国にルーツを持つ生徒を対象とした特別入試を実施する大学はまだごく一部に限られている。また、各大学における特別入試の定員数は少なく、出願資格の要件も一様ではない。外国にルーツを持つ生徒を対象とした特別入試を経ずに大学に進学した場合、外国にルーツを持つ学生は一般的な国内学生に内包されて「見えない」存在となる。TIUにおいては、日本語で学位を取得するプログラム（以下Jトラック）では一般的な国内学生に、英語で学位を取得するEトラックでは一般的な留学生に内包され、学生本人が自らの背景を明示しない限り、不可視の存在となっている。外国にルーツを持つ学生が在学する多くの大学において、同様の状況が生じていると推察される。

1.4 東京国際大学の日本語教育

本研究は、日本語を履修していた外国にルーツを持つ学生の存在が端緒となっているので、ここでTIUの留学生数と日本語コースについて概況を記す。大学ホームページによると、現在の留学生数は約1,800人である。⁸⁾ その中には、学部生、大学院生、交換留学生、JSP（Japan Studies

Program) 生が含まれる。国内学生、留学生ともに、英語で学位を取得するEトラック、日本語で学位を取得するJトラックのいずれにも入学可能である。日本語コースは、①Elementary Japanese 1, ②Elementary Japanese 2, ③Intermediate Japanese 1, ④Intermediate Japanese 2, ⑤Advanced Japanese 1, ⑥Advanced Japanese 2, ⑦Upper Advanced Japanese, ⑧Business Japaneseの8レベルが開講されている。入学時に日本語プレイスメントテストが実施され、入門レベルの学生は①Elementary Japanese 1が必修となる。②から⑧は選択科目で、履修するかどうかは学生による。①は8単位、②から⑥は4単位、⑦と⑧は2単位となっている。①から⑥は総合的に4技能を学ぶもので、会話・読解・漢字といった技能別ではない。コース名が英語表記なのは、原則英語で学位を取得するEトラック生に開講されているためと考えられる。

2. 先行研究

2.1 大学の特別入試制度

まず、外国にルーツを持つ生徒の大学入試を対象とした先行研究について概観する。

樋口・稲葉(2018)は、大学が実施する多様な入試制度が、外国にルーツを持つ生徒にとって重要な進学手段となっていることを指摘している。近年の大学入試の潮流として、学校推薦型選抜と総合型選抜(旧アドミッション・オフィス入試)を利用する生徒の割合が増加しているのは広く認識されていることである。志賀(2022)は、外国にルーツを持つ生徒の大学進学の際路を明らかにする資料はないとしながらも、外国にルーツを持つ生徒の背景が、総合型選抜においてアピール材料となり強みに転換できる可能性を指摘している。

広く国内学生を対象とした特別入試制度とは異なる取り組みとして、外国にルーツを持つ生徒を対象とした特別入試が増加傾向にあることは既に述べた。国立大学で初めて外国にルーツを持つ生徒を対象とした特別入試を導入した宇都宮大学の田巻(2020)は、「国際学部外国人学生体験レポート」に、外国にルーツを持つ卒業生・在学生のライフストーリーとも言える体験談を掲載した。特別入試を経て入学した学生の大学進学前の経験、大学進学の際路、アイデンティティ、将来への展望を知ることができる貴重な事例である。関東の私立大学で初めて外国にルーツを持つ生徒を対象とした特別入試を導入した東洋大学の木村(2024)は、留学生受け入れだけがグローバルではなく、日本社会の国際化と多様性を学内に反映させることの重要性を説き、特別入試の導入の際路や課題を率直に述べている。山森・田口(2024)は、外国にルーツを持つ生徒を対象とした特別入試制度の実態を調査し、特別入試を実施する大学側の目的として、外国にルーツを持つ生徒の大学進学率の低さと進学の際路や支援が不十分であることへの憂慮、外国にルーツを持つ生徒の潜在能力への評価・期待と将来への期待、外国にルーツを持つ生徒が異文化理解や多文化共生を実践することで、日本人学生や留学生を含め全ての学生たちの成長を促し、大学の国際化、多文化化に貢献してくれることへの期待があると指摘している。これら大学側の目的を概観すると、外国にルーツを持つ生徒を対象とした入試制度は、彼らの置かれた不利な状況への救済的側面だけでなく、大学側の多様性受容の姿勢や外国にルーツを持つ学生への期待、また、外国にルーツを持つ学生は一般的な日本人学生や留学生とは異なる存在であるという認識が読み取れる。

2.2 大学入学後の進路選択

次に、大学入学後の進路選択を対象とした先行研究について概観する。

日本社会の労働人口の不足と留学生増加に伴い、留学生の日本における就職に関する研究は一定の蓄積を見せている。大学・大学院を卒業・修了した外国人留学生は、「専門的・技術的分野の在留資格」を持つ高度人材の候補生として、国内での就職・定着が強く期待されており、政府の「成長戦略フォローアップ（令和3年6月18日）【別添】工程表」では、「2025年度末までに我が国の高等教育機関を卒業・修了した外国人留学生（国内進学者を除く）のうち我が国での就職者の割合50%を目指す」としている。⁹⁾しかし、結城（2023）によると、2022年度の大学（学部・大学院）段階における外国人留学生の国内就職率は33.3%と、政府が目標とする50%には遠い。また、大学（学部・大学院）に在学する外国人留学生の63.2%が「日本において就職」を希望しているのに対し、約半数しか実現できていないのが現状である。結城は、文部科学省委託事業である「留学生就職促進プログラム」及び「留学生就職促進教育プログラム」認定制度に焦点をあてて検証を行い、国内企業への就職支援の取組が進んでいるものの、定着支援については課題となっていることを指摘している。また、志甫（2009, 2012）は、日本における就職活動の留学生側の問題意識として、日本の就職活動は早期に始まるため多くの留学生は学業やアルバイトのために乗り遅れてしまうこと、企業側が抱く「日本語能力が不足している」というイメージや特にビジネスレベルの日本語能力がネックとなっていること、多くの留学生は大企業志向が強いこと、留学生によっては明確なキャリアパスを描き日本に固執しているわけではなく「逃げ場」の意識を持っていること、「外国人を募集している企業が少ない」といった不満や年齢制限等が述べられている。

留学生の日本での就職・採用における課題については以上のように報告がある一方で、外国にルーツを持つ学生の大学進学後の進路選択を明らかにする研究は管見の限りでは少ない。劉（2020）は、中国にルーツを持つ学生の大学における経験と卒業後の進路選択の關係に着目し、これまでの研究ではニューカマーの子どもがどのように大学進学を果たすのかという大学の入口に重点が置かれてきたが、大学での経験と過去の経験がどのように結びつけられ、そして将来展望にどのような影響を及ぼすのかを問うことも重要だと指摘している。また鄭（2022）は、南米にルーツを持つ学生が自らを留学生とは異なる属性を持つ存在として認識していることを明らかにし、留学生と外国にルーツを持つ学生を同一視する見方に対して異なる見解を示している。これらの先行研究は、特定のエスニックグループに属する外国にルーツを持つ学生に焦点をあて、大学に進学してからのキャリア形成の課題と将来への展望を考察している。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、東京国際大学に在学する外国にルーツを持つ学生へのインタビュー調査をもとに、彼らの大学進学の間緯とキャリア形成の意識の一端を明らかにすることで、大学という場で行える支援を考えることである。そのために、以下の研究課題を設定した。

1. TIUに在学する外国にルーツを持つ学生は、どのような間緯でTIUを選択し、Eトラック及びJトラックへの入学に至ったのかを明らかにする。
2. Eトラック及びJトラックに在学する外国にルーツを持つ学生は、卒業後のキャリアについて現在どのように考えているかを明らかにするとともに、大学での支援のあり方を検討する。

一大学に限られた事例研究であり一般化は難しいものの、外国にルーツを持つ学生の可視化を試み、先行研究で得られた知見をもとに考察することは、外国にルーツを持つ学生をめぐる課題を構造的に把握し、今後の支援のあり方を継続的に検討していく上で有用であると考えられる。

4. 研究の概要

4.1 調査方法

本研究は調査協力者の人権と個人情報の保護について東京国際大学の倫理審査委員会による承認を受け、2024年10月に半構造化インタビューによる調査を開始した。また、調査結果は個人が特定されない範囲で研究や教育に利用及び公開する旨、協力者より同意を得ている。インタビュー協力者の日本語学習歴や日本語レベルは問わず、調査開始時にTIUに在学しており、入学する以前に、日本で公立または私立の小学校・中学校・高校のいずれかや、インターナショナルスクール、民族学校等に通った経験がある学生を対象とした。国籍やエスニックグループは限定しなかった。日本語コースの担当教員を通じて募集を行った結果、15名から応募があり、インタビュー協力への同意と日程調整を経て、11名に依頼した。そのうち1名はインタビューの過程で、来日が親の短期駐在に伴う滞在であり、日本での就学も帰国を前提とした短期間であったことがわかった。そのため分析対象には含めず、最終的には10名となった。インタビュー実施方法は1人60分程度、対面またはzoomを使用して半構造化インタビューを行った。インタビューの際の使用言語は、日本語と英語のいずれか話しやすいほうを選んでもらい、協力者Iは英語、その他の9名は主に日本語で話した。また、インタビューは録音・録画し、文字化したデータを基にオープン・コーディング(佐藤2008)を用いて、回答の比較分析を行った。

インタビュー項目は以下を中心とした。

- ・母語や日本語、その他の言語との関わり
- ・日本社会での経験
- ・進学先を選択した経緯
- ・卒業後の進路をどのように考えているのか
- ・教員にどのようなサポートを期待するか

4.2 協力者について

インタビュー協力者の概要は表1にまとめた。学年はインタビュー実施時のものである。インタビュー協力者AからJの10名全員が3～4言語を使用する複言語話者である。自己認識に基づく第一言語は、協力者A, Bは日本語、協力者C, H, Jは英語、協力者D, E, F, G, Iは家庭内使用言語と回答した。来日時期は、日本生まれを含む就学前が協力者D, G, I, J、小学校時期が協力者A, B、中学校時期が協力者E, H、高校時期が協力者C, Fであった。滞日年数は、最も短い協力者Cの5年から、最も長い協力者Dの23年と幅広い。大学進学以前に日本で通った学校は、公立あるいは私立の日本の学校が協力者A, B, C, E, F, G, H、インターナショナルスクールが協力者I, J、インドネシア学校が協力者Dであった。協力者A, Bの2名はJトラックに在学し、協力者CからIの8名はEトラックに在学している。Eトラック8名のうち協力者D, G, Hは日本語能力試験(以下JLPT) N1、協力者FはN2を取得しており、大学進学に必要なとされる日本語力を有していたが、主体的にEトラックを選択していた。

表1 インタビュー協力者

協力者	学年	出身国	来日時期	滞日年数	日本で通った学校	家庭内使用言語
A	1	フィリピン	小3	10年	公立小、公立中、公立高	日本語 ¹⁰⁾
B	2	中国	9歳	10年	公立小、公立中、私立高	中国語 日本語
C	3	フィリピン	18歳	5年	公立高	日本語 フィリピン語 ¹¹⁾
D	4	インドネシア	0歳	23年	インドネシア学校（小中高） ¹²⁾	インドネシア語
E	3	ネパール	中1	8年	公立中、公立高	ネパール語
F	4	ベトナム	高1	6年	私立高	ベトナム語
G	3	ネパール	0歳	10年	公立小	ネパール語
H	3	フィリピン	12歳	8年	公立中、公立高	英語 フィリピン語
I	2	パキスタン	0歳	8年	インター（中高）	ウルドゥ語 英語
J	4	フィリピン	5歳	18年	インター（小中高）	フィリピン語 英語

*協力者AとBは、Jトラック生。協力者CからJは、Eトラック生。

5. インタビュー結果

外国にルーツを持つ学生へのインタビューで語られた内容を、大学進学の原因とキャリア形成の意識の観点からみていく。論文中に引用するインタビュー協力者の発話は原文のまま記載する。インタビュー中に日英が入れ替わったり、混じったりした場合、筆者が文字化データを複数回確認し、発話者の意図に沿うよう注意を払いながら日本語として意味の通る文で記載する。ただし、文脈上日本語に置き換えることが難しいと判断した部分は英語の表現をそのまま記載することとする。発話者は、協力者A～Jで記す（表1）。また、引用文は「イタリック体」で記し、筆者が目付した箇所には下線を付した。

5.1 大学進学の原因

1.2で述べたとおり、高等教育機関への進学において、日本語指導が必要な生徒は不利な立場に置かれている。では、インタビュー協力者はどのようにして大学進学を果たしたのだろうか。インタビューから、協力者が大学進学を選択したいくつかの主要な要因が確認できた。まず、親や親族が大学進学を当然と考え後押ししていたことである。卒業後に米国の大学院への進学を検討している協力者Eは、そこにも親の後押しがあると語っており、大学入学後も親の教育に対する考えが影響していることがうかがえた。

協力者A「私は一番お母さんがすごくサポートしてくれたっていうのがあって、お父さんもなんですけど、お金がなくてもいいからみたいな感じで、奨学金もあるし、できたら本当に大学入って、好きな勉強をしてって言われたんで（中略）私、本当に迷ったんですけど、大学行くか就職するかっていうの。それでも大学行ってって言われたんで、大学を選べられたかなと思って。」

協力者C「子供の時から大学は行こうと思ってた。フィリピンだと、必ず大学に行かないといけないんですね。そういう文化があるんです。大学卒業しないと人からのイメージが、なんでその人が大学行けなかったの？みたいな。フィリピンだったら大学卒業しないと仕事見つからないというイメージがあるから、お母さんと友達とかみんな大学が必ず行くと言われました。」

協力者E「今でも留学や、もっと勉強しなきゃだよって言われる。」

2つ目の要因は、高校における進学サポートである。大学進学の際の経済的負担を懸念する生徒にとって、特待生枠入試や奨学金申請のサポートを受けることは、大学進学を実現する上で大きな支えとなっていた。

協力者A「先生のサポート、高校でサポートを受けて、入れることができたので、それが、お母さんにも負担を半分にしたっていうか、奨学金も取って。」
「自分では入れるかなって思ってて、不安だったんですけど、実際面接の練習とかして、（先生に）行けるよって言われたんです。」

協力者C「奨学金、なんだっけ、JASSO。（中略）最初がすごい複雑だから日本語だし、私も細かいところがわからないから、先生が全部サポートしてくれました。こういう書類出さなきゃいけないよ、みたいとか、ちょっと簡単な言葉で説明しました。パンフレットはめっちゃ厚くて、私もほぼ読めなかったんです。全部翻訳するんだったら時間かかるし、だから、先生がちょっと一回読んで、こういう手続きがあるよ、みたいに言われました。」」

この他、高校における進学サポートとして、協力者D、Iは高校内で実施された大学のガイダンスに参加して進学情報を入手していた。この点も高校における進学サポートに含まれよう。

3つ目の要因は、知人・友人からの情報入手である。協力者Gは日本生まれで、小学6年生でルーツ国に移動し、中学と高校はルーツ国で卒業した。大学は両親がいる日本を選択したが、日本語で入学試験を受けることには困難があり、母親の知人から情報を得たことにより、Eトラックに入学した。

協力者G「最初は日本語で試験受けて、大学入ろうと思ってたんですね。で、本当にめっちゃ難しかった。数学とか理系とかの勉強とか授業とか受けてやってたんですけど、本当に難しくって。お母さんの友達に、こういう大学もあるんだよって紹介されて。」」

協力者Gにとって、TIUに進学する大きな決め手となったのは、Eトラックの存在である。その他にも、インタビューではTIUに進学した理由として、大学の国際性と多様性、英語力向上への期待、入りやすさが挙げられた。特に多く挙げられた理由は、大学の国際性と多様性である。

協力者A「TIUには国際力っていうのが看板とかいろんな所に書いてあったんで、実際見学行ったり、池袋と川越の方も行ったりして、一番印象的だったのがEnglish Commonsとかがあって、実際外国人の先生と話せるっていうのがすごく魅力的だったんで、選びました。」

協力者B「視野を広げるためにやはりいろんな多様性が多い学校をしたいかなと思っていて、そうならちょっと国際性が高い、留学生が多い環境の中がいいかなと探している中で、TIUも出てきて、(中略)実際にいくつか合格している大学の中で一番国際性が高い大学はこのTIUで、ここにやるのが決まっていなくて、とりあえず国際関係学部といういろんな人と関わられるような学部を取って、大学だけで自分のやりたいことを決めようかなという感じで、大学の多様性を中心に考えてみました。」

協力者H「いろいろな所、w大学、どこだっけ？w大学、h...h大学とかも見学してたんですけども、結構TIUの方が国際的に良さそうだったんです。で、TIUにしました。」

協力者A、BはJトラック生、協力者HはEトラック生であるが、3名とも他大学との比較を通してTIUの国際性と多様性を認識し、主体的に進学先として選んでいた。また、大学に国際性と多様性を求める背景には、大学入学以前の学校経験が示唆された。インタビュー協力者がTIUに進学した理由として挙げた国際性と多様性とは、単なる英語環境を意味するものではなく、多様な学生が在学する環境がもたらす安心感だと考えられる。

協力者B「(中学時代を振り返って)学校にいる中国人が私のことを見ると、あの子は日本人としか話さないし、遊ばない子だから別に関わりたくないな、みたいな感じされるような環境で、私もなんだろう、逆にちょっと心配したのは、逆に中国人たちのグループ、小学校をみたようにずっと中国人と遊んだら、また再び日本人のグループ入れないかなってちょっと心配し始めて、今大学だと、やはりこの多様性の文化の中で、どんな人と関わっても普通の環境の中で、私は今中国人と関わっても、後で日本人と関わっても普通のような環境とはちょっと違って、中学校とか小学校とは、その、向かう文化は単一であるかなと思いました。自分は選択しないと、どっちかにちょっと個別されちゃうかなってなると思いました。」

協力者E「TIUにして、いろんな国から来てる学生がいるから、勉強しやすい。自分一人じゃなくてみんないるからって思って、勉強しやすい環境かなって思います。」

進学先にTIUを選んだ2つ目の理由は、英語力向上への期待である。複言語話者である外国にルーツを持つ学生は、将来の進路も見据え、目的に応じた各言語力の向上を意識している。協力者Hは来日してから3年でJLPTのN1を取得するほど日本語の習得が早かったにもかかわらず、大

学進学の際には英語力向上を期待して、主体的にTIUのEトラックを選択していた。また、パンデミック時における入境制限が進学先の選択に影響した学生もいた。

協力者H「高校に入った時、外国人の友達と英語で話す時、結構日本語が急に出てきて、話す時はずっと英語じゃなくても急に日本語の単語が出てきて、そろそろ英語を学びに行かないきゃヤバいなっていう感じがしましたので。」

協力者F「コロナで、そういうボーダーが閉じるんじゃないですか。そうそう、だからまだ日本は、まだボーダー閉じてないから進もうかなと思って、TIUに応募しました。そういうEトラックの英語を話せるコースがあるんで、そういう目標で、Eトラックを応募しました。」

3つ目の理由は、TIUの入りやすさである。2.1で述べたとおり、先行研究では大学が実施する多様な入試が、外国にルーツを持つ生徒にとって重要な進学手段となっていることが指摘されている。インタビューでは、大学の難易度から見た入りやすさだけでなく、入試方法の入りやすさが言及された。選抜方法が小論文だった場合、聞く・話す力より、読む・書く力が弱い外国にルーツを持つ生徒にとって負担が重く、協力者Aの事例のように、TIUの選抜方法が面接であるという点は、心理面でのハードルが下がる要因だった。

協力者A「d大学を受けるのに小論文を書かないといけなくて、それも苦手だなと思って避けました。(TIUは)面接だけだったんで。」

協力者D「他の大学、w大学とかt大学とか頑張ったんですけど、ダメで、で、お母さんがもういいや、TIUにしなさいよみたいな感じで、私もじゃあいいやって、TIUにするみたいな感じで、TIUに応募しました。」

協力者J「単純な理由。International universityに行きたかったし、入りやすかったから選んだ。」

この他、TIUを選んだ理由として、キャンパスの立地、学部への興味・関心を挙げた協力者がいた。以上のように、協力者が大学に進学した主な要因として、「親や親族からの後押し」「高校における進学サポート」「知人・友人からの情報入手」があったことが明らかになった。また、TIUに進学した主な理由としては、「大学の国際性と多様性」「英語力向上への期待」「入りやすさ」が挙げられた。これらの要因や理由に、Jトラック生とEトラック生の間に差異はなかった。Jトラックを選択した協力者A、Bは、第一言語を日本語と回答しており、その自己認識が選択に影響していた可能性がある。一方、Eトラックの協力者は、日本国内で英語による学位取得が可能な大学が限られていることから、進学先の選択肢が少なく、併願校の難易度が著しく異なっていた。にもかかわらず、インタビュー協力者全員がTIUに進学したことを肯定的に捉えていたことは注目に値する。国際性と多様性を有する受容性の高い環境が、「TIUを選択して良かった」「勉強がしやすい」「語学の勉強に対するモチベーションが高まった」といった評価につながっていた。以上のことから、TIUは大学進学を希望する外国にルーツを持つ生徒の進学の受け皿として、役割を果たしていると言えるだろう。

5.2 キャリア形成の意識

国際性と多様性に魅力を感じ、英語力向上を目指してTIUに進学した学生は、卒業後の進路をどのように考えているのだろうか。筆者は、外国にルーツを持つ学生の多くが日本以外での就職を希望しているのではないかと考えていた。その予想に反し、協力者Eを除く9名が日本での就職を希望していることが明らかになった。また、協力者Eも米国の大学院進学を第一志望として挙げたが、大学院進学が叶わなかった場合、日本で就職したいと述べていた。10名の間に、滞日年数、日本語力との相関性は見られず、日本に慣れていること、家族が日本にいること、治安の良さ等が日本を選ぶ理由として挙げられた。

協力者A「日本でちょっとキャリアというか、スキルを上げてから、できれば外国でいろいろなところに行ったり、お仕事をしたりしたいなと思っています。」

協力者C「日本の会社ではなくて、外資系の会社で働きたいんですけど、英語と日本語両方できる会社に入りたいですね。あとは、私経験ないから、もう少し日本で働きたいと思います。」

協力者F「就活次第ですかね。日本でもっと長く住みたいだから、頑張って日本語を勉強しようかなと思いますね。」

協力者G「会社とか、日本で就職しようと思ってるんで、やっぱりそうやって仕事をするには日本語のスキルをもっと上げた方がいいと思います。(中略) 国際的な人材を探している会社だったら、英語もできるし、ネパール語もできるし、日本語も1級あるし、すごくいいかもしれないです。(中略) 大学入って、日本で生活して、それで変わったんですかね。日本は安全。それは一番だと思います。」

協力者I「I mean my father also wants us to stay in Japan and we are already in Japan and he teaches us all this because he knows that in the future he said to interact with his company because he knows that in the future I want to work for a Japanese company so that's why he likes to introduce us to Japanese.」

「日本での就職」の捉え方は様々で、協力者F、G、Iのように長く住み続けることを考えている学生もいれば、協力者A、Cのように日本で経験を積み、いずれは他の国に行くことを考えている学生もいた。また、協力者C、Gのように日本での就職を希望してはいるものの、外資系企業やグローバル企業を目指していると語った学生もいた。日本企業で働くことに不安を感じる背景には、日本の労働文化への否定的なイメージ、大学在学中から始まる就職活動への違和感等があった。

協力者A「ちょっと日本の悪いイメージでもあって・・・。(中略) 日本のやっぱり働きやすいのもあるんですけど、やっぱり給料が。私の小学校の代から言われてたんで、私の代には給料が減るっていうことを聞いたんです、税金が上がったりしてて、働けてもお金持ちにはなれないっていう時代って言われてたので、ちゃんとそれも考えて、外国で

働きたいのが一つです。」

協力者B「日本だと、ああいう見えないルール。会社などにもきつと多いとっていて、飲み会とか、ああいうルールとか、時々思うのは自分は外国人だから、そういうルール、見えないルール、従わなくてもいいかなって思うけれど、でも自分はずっと長時間日本にいたので、外国人にとってそういうルールは全然従わなくても全然大丈夫よ、でも自分にとってはやはり従うべきかなってなっちゃうような、時々どっちなってなるような心配がありますね。」

協力者C「私もビジネスの授業を受けて、こういうコミュニケーションを取らないといけない。文化の違いもあるんですね。(中略)私のことが理解できない。理解できないかもしれないから、そこがちょっと困るかもしれないです。日本語力か、それとも自分の行動。多分、日本人にとって理解できないかもしれないから、そこがちょっと不安かなと。」

協力者E「大学入ってから、日本の会社入ったらこうなるよとかも聞き始めて、日本に会社入った後も辞めたよっていう先輩たちもいるんですけど、で、あーと思って、その後、何だろう。なんかあんまり、あんまりポジティブじゃなくて。」

協力者H「普通に、あの、過労死。仕事の文化とか、いろいろ日本だとなんか結構厳しいっていう感じがします。たまにいいことだと思われるんですけど、ずっとだとあんまり良くないなっていう感じがします。」

「就活についてなんですけど、日本って1年に1回しか応募しないんじゃないですか。普通に1年前とかでも就活しなきゃ。ちょっと大変だなっていう感じがしました。(中略)学生をやりながら就活のことも考えなきゃいけないし、まだ学生なのに社会人のことを考えてるっていう感じがします。」

協力者I「*I do think that a lot of the Japanese people that I've seen in interviews and who have told about reality, they say that work is life, like the such and everything. And I kind of disagree because I don't really think that work is life. Work is part of life. So I don't know if I can survive in Japanese work culture. So I do want to work in Japanese companies for a while to get some experience. And then I hope I can probably open my own company with some partners or something.*」

協力者J「(周囲の人は)自分が夢中になれるものや経験の機会を探していると誰も言わない。だから、(自分も)自分のキャリアについて心配。周りから聞くことは、ジョブハンティング、ジョブハンティング、ジョブハンティング。だから、卒業後の選択肢についてそれ以外の見方ができない。」¹³⁾

以上のように、インタビュー協力者にはそれぞれに現時点で思い描く就職のかたちとそれにま

つわる不安がある。また、大学入学後に何らかの変化があり、現在の考えに至っていると述べた協力者もいた。前述した協力者G、Eの発話からは、大学での授業や友人・先輩との交流が今後のキャリアを考える上で影響を与えていることがわかり、高校卒業の段階から一歩進んだキャリア形成の意識がうかがえた。

キャリアセンターでの就職支援等の影響も大きい。協力者Cは書類準備等をサポートしてもらい、安心して就職活動に臨めたことを話した。また、協力者Fは当初は外資系企業のみを志望していたが、キャリアセンターの職員との面談を経て、日本企業への応募も検討するようになったと述べた。

協力者C「私にとってだったらいいサービスです。まあ、ときどきに〇〇さんが、私のなんていうか、レジュメとか履歴書をいろんなところで見たりとか、(中略)日本語の文法とか文章とかいろいろなところ修正しましたとか、まあ、日本の文化も、なんていうか、仕事の文化とか、こういうところがありますよみたいな。本当に助かりました。」

協力者F「(キャリアセンターの) 〇〇さんが外資系だと、外資系って外国の会社から日本に来るんじゃないですか、たまに倒産とかそういう危機があって。日系の会社のちょっと目を通した方がいい、行った方がいいよってアドバイスしてくれたんですね。だから(就職活動は、外資系企業と日本企業と)両方とも行っています。」

さらに、Eトラック生では敬語への不安やJLPT取得に言及した学生がおり、入試の際に必要なとされなかった日本語力が、大学卒業後の進路を考える上で課題となっていることが明らかになった。

協力者D「[どんな授業を履修したいか問われて]ビジネス日本語とかも私も気になる。気になってくるよ。気になります。」

協力者H「たまに読めない漢字とかが急に出てきて、今でもBusiness Japanese (の授業)とか取ってるんですけど、急に見たことない漢字とかも出てきて、結構、辞書とか使わないと読めないんですよ。」

協力者E「[JLPT受験について問われて]受けてみたいです。受けてい。でもなんか失敗するのが、そういう失敗するのが心配しながらいるから、今まで。」

協力者J「日本語の心配はちょっと、やっぱり敬語が話せないと。あと、話す時は結構、言葉の意識ができない。ため口が滑っちゃうみたいなの。」

これらの事例から、TIUに進学した外国にルーツを持つ学生は、日本の労働環境や言語の不安を抱えながらも、日本で就職する道を模索していることが明らかになった。

インタビューからは、彼らが日本社会とどう向き合い、関わっていくべきなのかを自身のキャリア形成と照らし合わせながら悩み、模索している様子もうかがえた。彼らにとって日本とはどのような場所なのか。協力者D、I、Jは、「ホーム」と表現した。協力者F、Gの発話にも滞日年数の長さによって形成された「ホーム」の意識が表れていた。日本をホームとみなす意識は、日本

に長期生活基盤を置くことで形成されるものであり、滞日年数が短い留学生には見られない。このことは、外国にルーツを持つ学生が、滞日年数が短い留学生とは異なるキャリア形成の意識を持つ可能性を示唆している。

協力者D「日本の国っていうよりホーム。国はちょっと違う。もっとホーム的な感じ。インドネシアに行くときはやっぱりちょっと違うなって思います。インドネシアに行くときやっぱり日本の方がいいなとか考えることもあるし、日本にいるときも、やっぱり自分はインドネシア人。日本人じゃない。」

「大学入ってからいろんな人と関わって、やっぱり私はインドネシア人だし、日本は自分の国じゃないけど、ホームって感じ。高校の時はそんなにあんまり考えてなかった。」

協力者I「*If someone asked me what my native country is, I would say Pakistan because that's where I'm from. But if someone says where my home is, I would say both the countries (Pakistan and Japan).*」

協力者J「(自分の国はフィリピンと話した後に、「日本は?」と聞かれて) *Japan? It's still home. But it's more people make me feel home. If I don't have my friends and people, I wouldn't consider home.*」

協力者F「長く日本で住んでるからそういうなんか、文化刻んでるんですよ。本当に長い。もう8年くらいかな。7年くらい。ずっとここにいたから、もう本当に日本でずっと暮らしたいですね。」

協力者G「自分も正直自信がなかったんですよ、前は。日本語が全然できなかった。で、今は結構できるようになって、やっぱり言語ができると自信も結構持てると思います。なので、それも、あと子供の時に日本にいたので、日本がいいかなって。」

6. まとめと実践への示唆

6.1 まとめ

本稿では、東京国際大学に在学している外国にルーツを持つ学生10名へのインタビューをもとに、大学進学の間緯とキャリア形成の意識に焦点をあてて考察を試みた。インタビューでTIUに進学した理由として挙げられた「国際性と多様性」「英語力向上」といった事柄は、将来の就職先として外資系企業やグローバル企業を意識していること、いずれは日本以外の国でも働きたいと考えていることにつながっていると考えられる。ここで言う外資系企業、グローバル企業は、日本国内で働ける企業を指しており、大学卒業後すぐに海外にある企業を積極的に目指したいと答えた学生は一人もいなかった。日本の労働文化に馴染めるかどうか不安を覚える一方、日本はホームであり、今自信を持って生活できる場所は日本だという意識から、日本にとどまり、少なくとも

も数年は経験を積みたいとの考えに至っていることがわかった。志甫(2009, 2012)では、留学生の場合、明確なキャリアパスを描き日本に固執しているわけではなく「逃げ場」の意識を持っている可能性があることが指摘されている。しかし、今回の外国にルーツを持つ学生へのインタビューで安直に日本での就職を考えている学生は一人もおらず、ホームである日本での就職を重要なステップとして捉えていた。この点において、外国にルーツを持つ学生は、留学生とは同一視できない存在と言えよう。鄭(2022)は、南米にルーツを持つ若者たちへの調査で日本生まれ・日本育ちの強みを聞いたところ、「日本文化や社会を知る(理解する)」が最も多かったとしている。また、生活基盤が日本にある南米ルーツ若者にとって、日本でのキャリア形成が一番現実的な選択肢となっていることを指摘し、これまでの常識に捉われないより自由な発想を生み出す可能性を秘める「第三の者」と位置付けた。本調査で語られた「日本はホーム的な感じ」「長く住んでるから文化刻んでるんです」や「やっぱり言語(日本語)ができると自信も結構持てる」「子供の時に日本にいたので日本がいいかなって」にも同様の意識が見てとれる。

一方で、志甫(2009, 2012)で述べられている留学生の日本語力への不安は、今回のインタビューで外国にルーツを持つ学生も全員がふれていた。特にEトラック生にとって、入試で日本語力が重視されなかったことは、進学の際にはメリットであったが、長く日本で生きていくことを考えた時、日本語力の必要性を再認識するとともに、現段階で自分の日本語力に自信を持っている学生がいなくても明らかになった。日本語力への不安が解消されることが、彼らにとって日本がホームであり続けるための一つの鍵となることが示唆された。

本調査を通じて、TIUのEトラック、Jトラックのいずれにも外国にルーツを持つ学生が存在することが可視化され、一般的な留学生とは異なる学習背景とキャリア形成の意識の一端が示された。就職活動のタイミングで敬語使用への不安を提起する学生が目立ち、同僚、上司、顧客とのコミュニケーションを円滑にとるための日本語支援が求められていることが明らかになった。また、キャリアセンターのスタッフが行っている履歴書や面接指導を含むサポートについて高く評価する声を聞いた。

6.2 実践への示唆

本稿で明らかになった外国にルーツを持つ学生の大学進学の間緯やキャリア意識の独自性、そして彼らが直面する課題を踏まえ、今後の実践への示唆として、大学や大学教員が行えるサポートについて具体的に考えてみたい。

まず、外国にルーツを持つ学生の可視化と個別支援についてである。外国にルーツを持つ学生がその多様な背景ゆえに、Jトラックでは一般的な国内学生に、Eトラックでは一般的な留学生に内包され「見えない」存在とならないよう、入学後早期に彼らを可視化することで、個別のニーズに応じた支援を迅速に行うことが可能である。山森・田口(2024)の指摘にあるように、日本語は話せるものの専門的な文章作成に課題を抱える学生や、大学での履修に必要となる高校までの教科学习到に未習箇所がある学生等、その課題は多岐にわたる。山森・田口は、このような学生に対して学習支援やレポート作成の支援を個別に行い、学生自身が自律的に学べるようになったら支援を終了するという柔軟な対応事例を報告しており、同様の支援はJトラックに在学する外国にルーツを持つ学生にとっても心強いサポートとなるであろう。また、この個別支援を可能にするために、Jトラック生とEトラック生の両方に開かれた支援・相談・カウンセリング窓口を設置できれば、学習面だけでなく、就職活動における敬語への不安や日本社会への適応といった心理的な課題にも対応できる包括的な支援体制を構築できる。

次に、コミュニティ形成とロールモデルの提示についてである。インタビュー協力者の声から、外国にルーツを持つ学生は日本はホームという意識を持ちながらも、就職活動において日本の労働環境に馴染めるかどうか不安を抱えていることが明らかになった。このような心理的な困難を乗り越え、将来への希望を具体的に描くためには、自分と似た境遇の成功者、すなわち「目に見えるロールモデル」の存在が不可欠である。大学が外国にルーツを持つ学生同士が繋がれるコミュニティ形成を支援することにより、学生たちは自分たちでロールモデルと出会う可能性を広げることができ、このようなコミュニティは、学生の学習意欲を高めることにもつながりうる。今回調査に協力してくれた学生の中にもインタビューを通じて自身の経験を共有し、後輩たちに役立ててほしいと述べた学生がいた。このことから、コミュニティ内では積極的な経験の共有が期待できると考える。

協力者B「やはり、多様性の文化にちょっといるので、この中で自分の経験が紹介できるを考えたたら、ちょっと助けられるなら、もしかして自分のこの多様性の文化を紹介できたかなと思います。」

協力者C「協力した理由は、私はここで5年間くらい住んで、自分の経験を他の人に伝えてほしいかなと思って、私も今、インターンシップやってますので、留学生の手伝うとか、自分の経験を留学生のために手伝ったり、このインタビューで自分の経験をシェアして、できるかなと思ってました。」

3つ目に、日本語コースについてである。外国にルーツを持つ学生は、日常会話は流暢でも学術的・専門的な日本語の語彙がわからない、文章が読めない・書けないといった日本語の4技能のばらつきが見られることが多い。例えば、画一的な日本語クラスではない、学生のレベルや課題に合わせて「読む」「書く」といった技能別に特化したクラス設置が可能となれば、日本語の授業をより履修しやすくなるであろう。また、日本語で授業を受けるJトラック生であっても、日本語能力に不安を感じているケースは少なくない。¹⁴⁾ Eトラック生だけでなく、Jトラック生も日本語クラスにアクセスしやすい環境を整備し、必要に応じて履修を促すことで、彼らが大学での学修を円滑に進め、将来のキャリアパスを着実に築くための基盤を強化できる。

最後に、外国にルーツを持つ学生への効果的なサポートを実現するためには、教員個人の努力によるだけでなく、大学全体として教職員間の情報共有と連携を強化する必要がある。特に、学生の学修状況や心理的な変化を把握する教員と、進路・就職支援を行うキャリアセンター、そして学修支援を行う担当者が密に連携することで、学生を包括的にサポートする体制を構築できるのではないだろうか。

おわりに

本研究ではエスニックグループと国籍を限定せず、日本語教員の視点から外国にルーツを持つ学生の一部を垣間見ることができた。日本社会では移民政策に関する議論が十分ではないまま、移民的背景を持つ人口は増加しており、日本で生まれた2世や、就学前・就学期に来日した1.5世が、既に大学進学や就労の段階にある。

今後の課題は継続的なインタビュー調査の実施である。今回、在学生へのインタビューから得

られた知見は、本稿で取り上げられなかったアイデンティティや言語観にまつわる分析も含め、同じような背景を持つ後輩たちのロールモデルとして役立つものになると考えている。さらに、ロールモデルとして発信していく上で、社会人となった卒業生が、様々な経験を通じて、自身のキャリアをどのように捉えるようになったのか知ることも重要である。あるTIUの外国にルーツを持つ卒業生との会話の中で、「日本で働いてみて、周囲に助けを求めただけではなく、自分の存在、自分の仕事がみんなの役に立っていると感じるようになった」という言葉を聞いた。社会人として、社会とより密接に関わるようになった時、自己評価がどのように変化し、その後のキャリアにどのような影響を与えているかは、大学卒業後の進路に迷う学生たちに、何らかの示唆を与えるものになるであろう。さらに、日本で就職を果たし、キャリアを積み上げて活躍する外国にルーツを持つ学生の姿が日本社会に広く知られることで、その存在を意識した就職支援が大学や企業の垣根を越えて行われることを期待したい。

最後に、外国にルーツを持つ学生として自らの経験とその思いを語ってくれた本研究のインタビュー協力者に、この場を借りて心より感謝申し上げる。

*本稿は移民政策学会2025年度年次大会（於 筑波大学 筑波キャンパス、2025年6月1日）において口頭発表した「外国にルーツを持つ学生はどのように進路を選択するのか——東京国際大学の事例から——」を修正・拡張したものである。発表時のコメント及び抄録査読者のご助言、ならびに共同研究者の津田麻美先生に感謝申し上げます。

注

- 1) 山森・田口（2024）によって、外国にルーツを持つ生徒を対象とした特別入試の出願資格が大学によって異なることが指摘されているように、「外国にルーツを持つ」の定義は一様ではない。本稿では、本人の国籍にかかわらず、どちらか一方の親かあるいは両親が外国人で、東京国際大学入学以前に日本国内の小学校・中学校・高校に在学した経験がある者を「外国にルーツを持つ学生」と定義する。
- 2) 出入国在留管理庁（2025）「令和6年末現在における在留外国人数について」
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00052.html
- 3) 出入国在留管理庁ホームページ「在留外国人統計統計表2015年12月末」によると、2015年12月末の在留外国人数は約223万人である。
https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html
国土交通省は「外国由来の人口」と表記しているが、本稿では「移民的背景を持つ人口」で統一する。
国土交通省（2020）「豊かな暮らしの実現について」スライド32 <https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001397297.pdf>
- 4) 新たに対象に加わったのは、ビルクリーニング、工業製品製造業、建設、造船・船用工業、自動車整備、航空、宿泊、農業、漁業、飲食料品製造業、外食業の11分野。
- 5) 文部科学省総合教育政策局国際教育課（2024）「令和5年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果」
https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt_kyokoku-000037366_02.pdf
- 6) 認知学習言語能力（Cognitive Academic Language Proficiency：CALP）の習得期間は、ジム・カミンズ（2006）「学校における言語の多様性——すべての児童生徒が学校で成功するための支援——」（中島和子・湯川笑子訳）を参照した。www.mhb.jp/mhb_files/Cumminshanout.docよりダウンロード可能。
- 7) 関西国際大学ホームページ 入試概要
<https://www.kuins.ac.jp/admission/guide/>
- 8) 東京国際大学ホームページ 留学生の受け入れ

<https://www.tiu.ac.jp/exchange/studying/>

- 9) 内閣官房成長戦略会議 (2021) 「成長戦略フォローアップ (令和3年6月18日) 【別添】 工程表」 p. 79
<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/seicho/pdf/kouteihyou2021.pdf>
- 10) 協力者Aは父親が日本人である。
- 11) 協力者Cにとって第一言語は英語と自己認識しているが、家庭内で英語はほとんど使用していないとの回答であった。父親が日本人である家庭環境が影響していると考えられる。
- 12) インドネシア学校の正式名称は、東京インドネシア共和国学校 (Sekolah Republic Indonesia Tokyo) である。日本に滞在するインドネシア人の子供たちにインドネシア語の授業を行うために1963年に設立された。幼稚園、小学校、中学校、高校がある。
- 13) この発話は協力者Jが日本語から英語に切り替えて話した部分であるため、文脈に配慮して筆者が意味の通る日本語に置き換えた。
- 14) 本稿の調査対象には含めていないJトラックの外国にルーツを持つ学生から、アカデミックな日本語力の不足と、日本語学習支援の必要性を聞いた。

上記注にある全てのURLは、2025年8月28日に閲覧可能を確認した。

参考文献

- 駒井 洋 (監修) (2024) 『多様な学びの場をつくる』 第4章, 村上一基「私立大学における「外国にルーツを持つ生徒対象入試」——東洋大学社会学部国際社会学科の事例から」 明石書店
- 是川 夕 (2018) 「日本における国際人口移動転換とその中長期的展望——日本特殊論を超えて」 『移民政策研究』 第10号, 移民政策学会, pp. 13-27
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析方法』 新曜社
- 志賀玲子 (2022) 「海外にルーツをもつ大学生による自己の在り方の意味づけ——授業の振り返りを糸口とした語りより——」 『一橋大学国際教育交流センター紀要』 第4号, pp. 15-26
- 志甫 啓 (2009) 「外国人留学生の日本における就職は促進できるのか——現状の課題とミスマッチの解消に向けた提言——」 『Works Review』 Vol. 4, リトルワークス研究所, pp. 208-221
- (2012) 「外国人留学生の日本における就職・採用の動向と大学による支援の意義」 『関西学院大学高等教育研究』 第2号, pp. 15-33
- 田巻松雄 (2020) 『宇都宮大学 HANDS10年史——外国人児童生徒教育支援の実践——』 第10章「国際学部外国人学生体験レポート」 pp. 121-151
- 鄭 安君 (2022) 「南米ルーツ大学進学者のキャリア形成とダイバーシティ——13人の「深層的なダイバーシティ」に着目した一考察——」 『異文化経営』 第19号, 異文化経営学会, pp. 103-118.
- 樋口直人・稲葉奈々子 (2018) 「隙間を縫う——ニューカマー二世世代の大学進学——」 『社会学評論』 第68巻4号, 日本社会学会, pp. 567-583
- 劉 昊 (2020) 「中国系二世世代の将来展望——大学進学後の経験に着目して——」 『日本国際教育学会紀要国際教育』 第26巻, pp. 1-17
- 山森理恵・田口香奈恵 (2024) 「外国ルーツの生徒を対象とした大学入試制度と受け入れの実態」 『明治大学教養論集』 通巻578号, pp. 185-209
- 結城 恵 (2025) 「外国人留学生の日本就職・定着をめぐる政策に関する一考察」 『LOGOS (ロゴス): 群馬大学大学教育・学生支援機構論集』 第2号, pp. 1-14